

2024年9月 15 日 敬老の日(聖霊降臨節 第18主日)礼拝メッセージ

「神の愛を感じる時」

牛田匡牧師

聖書 エフェソの信徒への手紙 3章 14-21節

皆様は「あなたは今まで、神様の愛を感じたことがありますか」と尋ねられたら、何とお答えになられるでしょうか。教会に来られている方々以外は、一体何を質問されているのか、ということ自体、よく分からないかもしれません。「神様の愛」って何? 誰に対する愛なのか。そもそも「神様」って、何の神様なのか? などなど、疑問に思われるのではないのでしょうか。日本では「神」というと、「田んぼの神」とか「水の神」、「山の神」「商売繁盛の神」「病気を治してくれる神」などなど、色々な物や事と結びついて連想されることが多いので、「愛の神」「縁結びの神」ならばともかく、「神の愛」と言われても、何のことやら、ちっとも分からないと感じられてしまうかもしれません。

それでは、質問の言葉を変えて、「これまで一番嬉しかったこと、幸せだったことは何ですか」と尋ねてみたらどうでしょうか。こちらの質問には具体的な答えが返って来そうです。何か成果を上げることが出来て表彰されたことや、出世したり、有名になったりしたことでしょうか。また希望した進路に進学や就職できたこと、結婚や出産、親しい家族や友人たちとの出会いに恵まれたことでしょうか。人それぞれだろうと思います。

次の質問です。「それらの嬉しかったことや、幸せだったことの背後には、何があったでしょうか」「あなたはどうやってそれらを手に入れることが出来たのでしょうか」。言い換えれば、「あなたがそれらを手に入れることが出来たのは、何のお陰だと思いますか」。こちらの質問にも、様々な答えがありそうです。「自分自身の努力のお陰」「家族のお陰」「たまたま偶然、運が良かったから」など。そのような様々な理由の中には、自分の力や計画ではない何か外からやって来た不思議な力、それこそ「ご縁」とか「運勢」としか言いようがないような、そういうもののお陰で、手に入れることが出来た、ということを感じておられる方もいるでしょう。また「これまでの人生は全部、自分自身で切り拓いて来た、選び取って来た、作り上げて来た」と断言する人もいるかもしれません。

しかし、この世に生を受けている私たちは誰もが年老いていきます。若い頃には自分で出来ていたことが、次第に自分で出来なくなっていく。それまで何事も自分の力でやって来ていた人が、自分の力で出来ることが少なくなっていく時、何を感じられるでしょうか。それこそ「自分は何の役にも立っていない、他人に迷惑をかけている」と感じられるかもしれません。しかし、自身の小ささや力の弱さに気付いた時、その場所からご自身のこれまでの歩みを眺め直してみると、全部自力で歩んできたと思って来ていた道が、実は様々な人たちから手伝われ、支えられ、与えられて来ていた道だったのだということに改めて気付くことが出来るのではないかと思います。私たちは誰も一人だけで生きている人はいません。好きになれない人や苦手な人、反面教師も含めて、多くの人たちとの関わり合いの中で、私たちはこれまでも、これからも生かされて行くのだと思います。

さて、今回の聖書の言葉は、全てのものに命を与え、守り導いておられる神様の、私たちに対する思いというものがどれ程大きいのか、ということを経験的な言葉で表現しているものでした。「詩編」103編には、「天が地よりも高いように／主の慈しみは主を畏れる者をはるかにしのぐ」と謳われています。人間が神に祈り、願うから、その見返りとして、神が人間に応えてくれるわけではありません。それでは神は人間の支配下、統制下にあることになってしまいます。人間が行動を起こす前から、神は既に、常に生きて働いておられます。その思い、慈しみは、人間の思いとは、天と地ほどの差があり、東と西ほどの開きがある、と謳われています。

また「エフェソの信徒への手紙」でも、16節で「どうか、御父が、その豊かな栄光に従い、その霊により、力をもってあなたがたの内なる人を強めてくださいますように」と祈られた後に、17節以降は「¹⁷あなたがたの信仰によって、キリストがあなたがたの心の内に住んでくださいますように。あなたがたが愛に根ざし、愛に基づく者となることによって、¹⁸すべての聖なる者たちと共に、キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さがどれほどのものかを悟り、¹⁹人知をはるかに超えたキリストの愛を知ることができ、神の満ち溢れるものすべてに向かって満たされますように」（17-19）と祈られています。この長い祈りの言葉の結論部分は、19節にある

「人知をはるかに超えたキリストの愛を知り、神によって満たされますように」ということであるわけですが、そこに至る条件として、17 節で述べられている「あなたがたの信仰によって、～あなたがたが愛に根ざし、愛に基づく者となることによって」というのが、まるで前提条件であるかのように読めてしまいそうになります。ですが、この聖書の翻訳は、主語を読者である人間の「あなたがた」ではなく、神様が自身として理解することも可能です。すなわち「命の源である神様の、あなたがた人間たちに対する信頼によって、神様がキリストをあなたがたの心の内に住まわせてくださいますように」という翻訳です。そして、むしろそのように理解する方が、それによって「あなたがたが愛に根ざし、愛に基づく者となり、すべての聖なる者たちと共に、キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さがどれほどのものであるかを悟り、人知をはるかに超えたキリストの愛を知ることができ、神の満ち溢れるものすべてに向かって満たされますように」と、スムーズに読めるような気がします。

陶芸でも絵画でも、アーティスト(芸術家・技術者)である作り手が、自ら作った作品を愛おむように、全ての命の創り主である神は、その創られた被造物の一つ一つを大切にされます。その神の思いがどれほどであるかを、私たちは計り知ることは出来ません。だからこそ「キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さがどれほどのものかを悟り、人知をはるかに超えたキリストの愛を知ることが出来ますように」と祈るのでしょう。

私たちの日々の暮らしの中で、嬉しいことと嬉しくないこと、良いことと悪いことはどちらが多いでしょうか。一生の間に誰もが「どちらも同じくらいある」と言う説を唱える人もいますが、「良いこと探しを毎日しよう」ということが、目標になるくらいですから、努めて意識しなければ「悪いこと」にばかり目と心が向いてしまう人が、多いのが現実なのではないかと思います。確かに、突然の大地震や、巨大台風、洪水などで、家も地域も破壊されたりしたら、「神も仏もあったものか」と思われるでしょうし、大きな事故や病気に遭うと「罰が当たった」「神から見放された」と感じられることも当然、あるだろうと思います。それは何も現代に生きる、私たちだけが感じる不信仰な思いではなく、聖書に記されている古代社会の人たちも抱いた、素朴な思いでした。

ヘブライ語聖書の中の「詩編」には、神様に対する感謝や賛美など、様々な詩歌が収められていますが、ジャンルとして最も多いのは、自身の不幸な境遇を嘆いた「嘆きの歌」と呼ばれるジャンルです。「どうして、自分はこんな状態になったのか。神よ、あなたはどこにいるのか、出て来て、顔を見せてほしい」（詩編 42 編）と。しかし、「神はどこにいるのか」と問い続けて、捜し求め続けても、神は見つかりません。なぜなら私たちの前に神がいるのではなく、神の中に私たちがいるからです（詩編 139:5）。私たちが見ることが出来る形で神がいるのではなく、私たちが知ることが出来るかには及ばない形で神は存在しています。そして、私たちはただ歴史の中を生きて歩まれたイエス・キリスト、その人の言葉と振る舞い、姿、生き様を通して神を知ることが出来ます。

私たちが神を探し求めるのではなく、神が私たちを探し求め、既に見つけてくれています。私たちが神を知るのではなく、神が私たちをいつも知ってくれています。なぜなら私たちは神の中に生かされているから。だからこそ、私たちは計り知れない「神の愛の広さ、長さ、高さ、深さ」がどれほど大きいかと想像することが出来るのではないかと思います。

年齢を重ね、高齢になって、教会に通って行くことができなくなっても、認知症になり、礼拝のことを覚えていられなくなっても、聖書を読んだり聞いたり、お祈りを忘れてしまったりしても、大丈夫。それで神様が私たちを忘れ、私たちを見放し、私たちの側から離れて行ってしまうことはありません。「神、常に共にいます」。全ての命は神様の大きな御手の中にあり、神様はいつでも一人一人の方と共におられます。「神の愛を感じる時」……。それはそれぞれの方のこれまでの歩みの中で、その時々^{そば}に確かにあったでしょうし、また今日、今ここでも、今を生かされている私たちは、神の愛の中に生かされています。そのことに信頼して、今日も神様によって導かれながら、歩み出して行きます。